

幼児の 母



昭和十五年

十二月

わが子の一年

ことしも暮れます。お母さま方は何かとお忙しいこととせう。わけても事の多い此の年の暮の忙しい中ですが、靜かにふりがへつて見ずにゐられないのは、わが子の一年です。不斷の成長をつとけて育つてゆく子どもの一年々々ですが、考へて見れば、ことしも亦、なんといふ有り難いことでしたらう。氣がついて見れば、背丈も伸びてゐます。心のはたつきも、ほゞ笑ましい程進んでゐます。

それと同時に、日々その時々の感謝もなくてはなりません。無事に成長をつづけた一年として、或は又、いろゝの障りにも打ち克つて此の年を送り得る今として、一とくぎりの感謝を思はずにはゐられません。殊に、大切なわが子の成長史の一卷として、その中には永く記念すべきことも尠なくなかつた筈です。謂つて見れば、ことしのお蔭で、わが子の成長が内からも外からも盛り上げられてゐるのです。

忘年といつた言葉もありますが、充實から充實へつゞくわが子の生涯の中で、ことしも亦忘れてならない貴い年でした。

母のこよみ

ことしのお歳暮とお年玉

わが子の爲に、ことしはどういふお歳暮をやりませう。又、どういふお年玉を用意ませう。これは十二月の母の一つの楽しみであるに相違ありません。又、なるべく澤山、子供を喜ばせてやりたいことに、異議のあるものはありません。

たゞ、ことしの暮も來るお正月も、時局下だといふことを、殊に、寒い戦地に澤山の兵隊さんが行つてゐて下さることを、更に、傷病兵の方々が病院のベッドにゐられることを、假りにも忘れることは出来ません。そこで、お歳暮もお年玉も、その心持ちを失はぬものにならなければなりませんし、兵隊さん達への感謝のお歳暮、お年玉といふ方にも心を配はられなければなりません。——勿論、子ども達を喜ばすことを忘れずに。